

とうきょう あかさか みち きのくにざか さかみち きい くに さか  
東京の、赤坂への道に紀国坂という坂道がある—これは紀伊の国の坂と

い なぜ きい くに さか よ わたし し  
いう意である。何故それが紀伊の国の坂と呼ばれているのか、それは私の知

こと さか いっぽう そば むかし ふか きわ ひろ ほり  
らない事である。この坂の一方の側には昔からの深い極わめて広い濠あつ

そ たか みどり つつみ たか た うえ にわち  
て、それに添って高い緑の堤が高く立ち、その上が庭地になっている、—

みち ほか そば こうきょ なが こうだい ほり なが がいとう じんりきしゃ  
道の他の側には皇居の長い宏大な塀が長くつづいている。街灯、人力車の

じだい いぜん あたり よる くら ひじょう きび  
時代以前にあっては、その辺は夜暗くなると非常に寂しかった。ためにおそ

とお とほしゃ にちぼつご きのくにざか のぼ いくり  
く通る徒歩者は、日没後に、ひとりでこの紀国坂を登るよりは、むしろ幾哩

まわ みち  
も廻り道をしたものである。

みな あたり ある むじな  
これは皆、その辺をよく歩いた貉のためである。

むじな み さいご ひと やくさんじゅうんねんまえ し きょうばしほうめん とし しょうにん  
貉を見た最後の人は、約三十年前に死んだ京橋方面の年とった商人であった。

とうにん かた はなし  
当人の語った話というのはこうである、—

しょうにん ばん きのくにざか いそ のぼ い ほり  
この商人がある晩おそく紀国坂を急いで登って行くと、ただひとり濠の

ふち かが な おんな み み なげ しんばい  
縁に踞んで、ひどく泣いている女を見た。身を投げるのではないかと心配し

しょうにん あし じぶん ちから およ じよりよく いしゃ あた  
て、商人は足をとどめ、自分の力に及ぶだけの助力、もしくは慰藉を与えよ

おんな きゃしゃ じょうひん ひと みなり きれい かみ  
うとした。女は華奢な上品な人らしく、服装も綺麗であったし、それから髪

りょうけ わか むすめ むす じょちゆう しょうにん おんな  
は良家の若い娘のそれのように結ばれていた。—『お女中』と商人は女に

ちかよ こえ じょちゆう な なに こま  
近寄って声をかけた—『お女中、そんなにお泣きなさるな！……何がお困り

わたし おつ うえ たす みち よろ たす もう  
なのか、私に仰しゃい。その上でお助けをする道があれば、喜んでお助け申

じっさい おとこ じぶん い とお こと つ なん  
しましょう』（実際、男は自分の云った通りの事をする積りであった。何と

ひと ひじょう しんせつ ひと おんな な つづ  
なれば、この人は非常に深切な人であったから。）しかし女は泣き続けてい

なが いっぽう 所で もつ しょうにん かお かく じょちゆう でき かぎ  
た—その長い一方の袖を以て商人に顔を隠して。『お女中』と出来る限り

しょうにん ふたた い わたし ことば き くだ  
やさしく商人は再び云った—『どうぞ、どうぞ、私の言葉を聴いて下さい！

よる わか ごふじん い ばしよ おたの もう  
ここは夜若い御婦人などの居るべき場処ではありません！ 御頼み申すから、

な たす こと でき  
お泣きなさるな！ どうしたら少しでも、お助けをする事が出来るのか、

い くだ おもむ おんな た あがっ しょうにん せなか  
それを云って下さい！』徐ろに女は起ち上がったが、商人には背中を

む 所で うめ むせ しょうにん て  
向けていた。そしてその袖のうしろで呻き咽びつづけていた。商人はその手

かる おんあ かた うえ お と た じょちゆう  
を軽く女の肩の上に置いて説き立てた—『お女中！お女中！お女中！

わたし ことば き  
私の言葉をお聴きなさい。ただちょっとでいいから！お女中！ お女中！』

む 所で した おと  
するとそのお女中なるものは向きかえった。そしてその袖を下に落し、

て じぶん かお な み め はな ぐち こえ  
手で自分の顔を撫でた—見ると目も鼻も口もない—きやツと声をあげて

しょうにん に だ  
商人は逃げ出した。

いちもくさん きにくにざか のぼっ じぶん まえ まっくら なに くうきよ  
一目散に紀国坂をかけ登った。自分の前はすべて真暗で何もない空虚であっ

ふ かえつ ゆうき はし あげく  
た。振り返ってみる勇気もなく、ただひた走りに走りつづけた挙句、よう

はるか とお ほたるび ひかつ み ちょうちん み ほう  
よう遙か遠くに、螢火の光っているように見える提灯を見つけて、その方

むか い みちばた やたい お う ある そばや ちょうちん  
に向って行った。それは道側に屋台を下していた売り歩く蕎麦屋の提灯に

す こと わ あ にんげん なかま  
過ぎない事が解った。しかしどんな明かりでも、どんな人間の仲間でも、

いじょう こと あ あと けっこう しょうにん そばう あしもと み  
以上のような事に遇った後には、結構であった。商人は蕎麦売りの足下に身

なげ たお こえ  
を投げ倒して声をあげた『ああ！—ああ！！—ああ！！！！』……

そばや さけ  
『これ！ これ！』と蕎麦屋はあらあらしく叫んだ『これ、どうしたんだ？  
だれ  
誰れかにやられたのか？』

いや だれ あいて いき き い  
『否、—誰れにもやられたのではない』と相手は息を切らしながら云った—  
『ただ……ああ！—ああ！』……

そばう と だろぼう  
『ただおどかさされたのか？』と蕎麦売りはすげなく問うた『盗賊にか？』

だろぼう おとこ あえ い  
『盗賊ではない—盗賊ではない』とおじけた男は喘ぎながら云った

わたし み おんな ほり ふち  
『私は見たのだ……女を見たのだ—濠の縁で—その女が私に見せたのだ

なに み い  
……ああ！ 何を見せたって、そりや云えない』……

み そばや じぶん かお  
『へえ！ その見せたものはこんなものだったか？』と蕎麦屋は自分の顔を

な い とも そばう かお たまご  
撫でながら云った—それと共に、蕎麦売りの顔は卵のようになった……そして

どうじ ともしび き  
同時に灯火は消えてしまった。